出土楽器が語る音の世界―歌鐘・行鐘―

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

中国古典文学における歌行

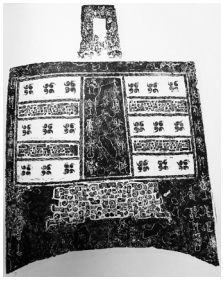
今回は、中国古代の出土楽器から文学のある核心に迫ることも可能だという事例をご紹介したい。それが「歌行」についてである。「歌行」とは何か。例えば「酒に対して当（まさ）に歌うべし、人生幾何（いくばく）ぞ」という句が人口に膾炙している曹操の「短歌行」（『文選』巻 27）や、李白の「行路難」、白居易の「長恨歌」、「琵琶行」など日本でも親しまれた有名な作品がすべて歌行であるといえば、中国古典文学において歌行がいかに重要なジャンルであるかが理解されよう。『広辞苑』には、「楽府の一体。歌と行とを兼ねた古詩の体で、おおむね長編」とある。この解説のなかの「歌と行」とは何か。大修館書店の『中国文化史大辞典』（2013 年）では、「歌行」という項目が設けられ以下のように説明されている。

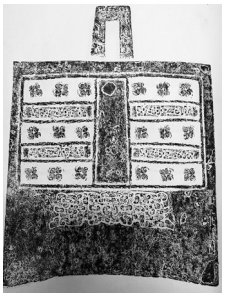
> 詩体の一つ。中国の伝統詩は唐初に成立した近体詩（今体詩）と古体詩（古詩）に大別されるが、歌行体は古体に属し、特に歌謡性の強いものをいう。もと漢の民間の歌謡である楽府に発する詩体で、「○○歌」「○○行」と題するものが多いことからこの名で呼ばれる。（136 頁）

ではなぜ同じ歌謡性の強いものが、「○○歌」「○○行」と区別されていたのであろうか。残念ながらそれについての言及は、この辞典には無い。

清水茂「『行』の本義」

これについて、一つの推論を学会に提示したのが、京都大学で長年中国語学・文学を教えていた清水茂であった。この論文は、1984 年に『日本中国学会報』第 36 集に掲載されたものである。清水氏は、「歌」については、「古代から『うた』もしくは『うたう』という意味であることがはっきりしている」として『尚書』舜典篇の「歌は言を永（なご）うす」などを引用され、経書に基づく常用語であったとする。一方で「行」について、宋以降の説明はあてにならないとし、六朝から初唐までの文献を渉猟・検討し、古辞「飲馬長城窟行」（『文選』巻 27）の李善注に「行は、曲なり」とある解釈が妥当だと判断した。そして、「行」はなぜ「曲」の意味になるのか、またどういう「曲」を「行」というのかの解答として、中国で発見された「行鐘」「歌鐘」を手がかりとした。





歌鐘と行鐘

清水氏が論文に引用したのは、1955 年の発掘に基づく安徽省博物館の報告『壽縣蔡侯墓出土遺物』（北京、科学出版社、1956 年）である。なかに「訶（歌）鐘」（上図）、「行鐘」（下図）と銘文がある楽器が出土したとある。

それは音程の違う鐘をいくつか並べてメロディを奏する「編鐘」であった。中国考古学界でも注目されたであろう。その音について詳細な研究をしたのが、李純一「関于歌鐘・行鐘及蔡侯編鐘」（『文物』1973 年、第 7 期）であり、清水氏はそれを翻訳して用いた。清水氏が示す李純一論文の結論は以下の通りである。

> 春秋戦国時期の歌鐘と行鐘の区別は、使用される場がちがうだけでなく、さらに一定の音と組み合わせのちがいにあった。つまり、歌鐘は、上層貴族の日常の饗宴の時に使用され、したがってそれは一つの完全な音階（あるいは調式）によって音を定め組合わせるものであった。行鐘は、上層貴族の巡狩征伐旅行のときに使用され、したがってその音の定めかたと組合わせは一つの音階（あるいは調式）中の骨幹音にもとづいていた。

李純一氏は、旅行用の音楽の聴覚的な効果は「sol-do-re-sol」で、簡単で剛健明快な曲調だけを演奏でき、熱烈激動の気分を造りだすのに適するばかりであるとした。清水氏は、李純一氏の論稿をひきつつ、それを「歌行」と結びつけて自論を展開する。

> その演奏には、歌鐘使用のときは、歌鐘の持つ音階による音楽が演奏され、行鐘のときは、行鐘の持つ音階による音楽が演奏されたと推測される。歌鐘の音階による音楽は、完全な音階を持つから、「歌」と題するか、あるいは特別の名が題されなかったのに対し、旅行用の音楽、つまり行鐘の持つ簡単な大音程跳躍の音階を持つ曲に対しては、旅行用の音楽という意味で「行」と名づけ、そして、それが旅行用でなくなっても、そのまま「行」の名を存したと考えられないだろうか。

もちろん、唐代以降になると「行」の本義はもはやわからなくなったと断っているが、「歌」「行」というものの謂れを説明する大胆かつ魅力的な推論である。21 世紀を四半世紀も過ぎようとしているいま、清水氏の推論はいかに受け止められているのだろうか。

清水氏の推論の行方

清水氏が根拠とした李純一氏の論稿については、発掘が進展している中国の考古学界では、管見の及ぶところ、最近では孫思雅「論両周青銅楽器之歌鐘与行鐘」（『音楽研究』2020 年、第 1 期）という論稿がある。孫氏は、歌鐘については李純一氏の結論を支持しているが、行鐘についてはなお今後の新たな考古学的発見と測音結果を待つ必要があるとして慎重な姿勢を示している。

それでは、清水氏の推論はどうであろうか。北京大学中文系教授であって歌行研究で有名な葛暁音氏に「関于“行”之釈義的補正」（『文学遺産』1999 年、第 4 期）という論稿がある。ここで葛氏は、清水氏の論稿を南山大学名誉教授の蔡毅氏の翻訳で見たうえで、「この考え方はとても啓発的である。『歌』と『行』が曲として説明され、その本義が紀元前 5 世紀の歌鐘と行鐘に遡るだろうという、この推論の信憑性はかなり高い」と紹介した。葛氏は、もともと単純な音階であった「行鐘」の歌唱法が、それゆえに何度か繰り返す形式だったはずだと推論して、ご自分の研究テーマである漢代以降の歌行の分野で、「行」が繰り返し歌われる形式であることと結び付けて論じている。葛氏の中国研究者への影響力を考えると、清水教授の説はすでに学界に受け入れられたと思われる。「歌鐘」と「行鐘」は、こうした中国と日本の研究者の研鑽によって初めて、古代の音楽のありかたを語りだしたのである。